

は っ く つ て ん び ょ う は な 発掘された天平の華

に ほ ん こ う こ が く せ ゃ う かい は っ く つ 日本考古学協会による発掘

昭和 31 年（1956）9 月 2 日、東京国立博物館学芸部長（当時）の石田茂作を委員長とする日本考古学協会の仏教遺跡調査特別委員会によって、初めて武蔵国分寺跡の本格的な発掘調査が行われました。

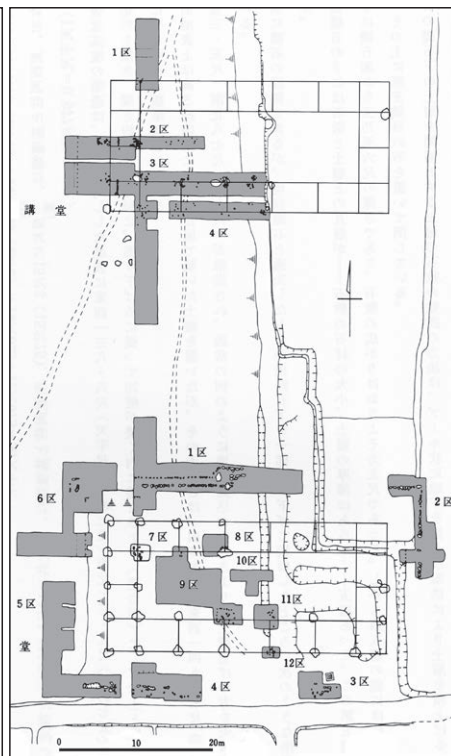
発掘調査は、遺構（遺跡中に残された人間集団の痕跡、住居・建物など）を掘らなければその実態を明らかにすることができませんが、掘るといことは遺構を壊してしまうことでもあります。そこで、石田委員長の方針によって、事前の地形調査や礎石・瓦の点在状態をもとに詳細な地形図の作成を行ない、その図をもとに掘る部分を決めることになりました。この方法によって適正な幅と長さの発掘溝（トレンチ）が設定され、調査は最小限の範囲の発掘で、最大の成果を得ることができたのです。昭和 31 年の調査では、武蔵国分僧寺の金堂・講堂の建物範囲や築造の実態などが明らかになりました。

武蔵国分僧寺跡では、歴史公園として整備するための事前遺構確認調査を断続的に行っていますが、当時の的確な調査手法で遺構が保存されていたことで、調査成果の再検証が可能となっています。



昭和 31・33 年度の調査区域

黒塗りの部分が調査範囲です。調査範囲を確定するために 1/500 の詳細な地形図が作成されました。



こんどう こうどう
金堂・講堂の調査図面

灰色で示した部分が発掘溝の範囲です。遺構の全てを掘るのではなく、規模が把握できるコーナーなど、掘る範囲を限定して調査しています。

明らかになった武蔵国分寺

昭和31年（1956）に続いて、同33・39～41年にわたって、僧寺の中門・鐘楼・塔、尼寺推定金堂・尼坊、伽藍地区画溝などが調査され、武蔵国分寺は諸国に建立された国分寺の中でも最大級の建物と寺域を誇る壮大な寺院であったことが明らかになりました。



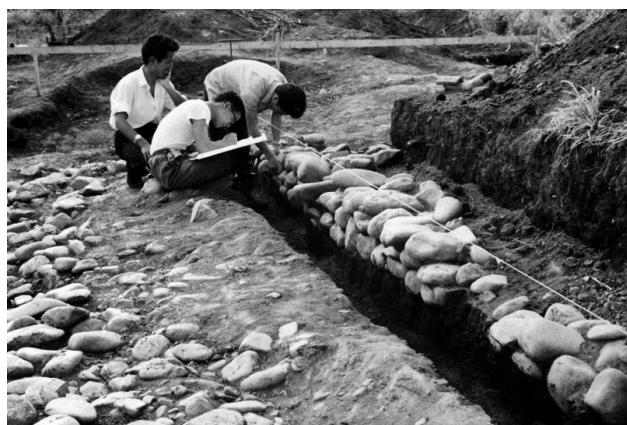
金堂の調査 昭和31年（1956）



講堂の調査 昭和31年（1956）



中門の調査 昭和40年（1965）



塔の調査 昭和39年（1964）



伽藍地区画溝 南東のコーナー 昭和40年（1965）
僧寺の範囲を区画していた幅1.75m、深さ1.45mの大きな溝です。塔心礎から東へ約42mの場所にあたります。



塔心礎
七重塔の中心柱を受ける礎石です。大きさ2.16×1.36mの巨石で、中央に直径73cm、深さ45cmの穴が開いています。